

職業訓練指導員のための 「ヒト・モノ・カネ」の基礎と実践 講義3 「カネ」についての重要性

職業能力開発総合大学校 職業訓練コーディネートユニット 原 圭吾

1. はじめに

皆さま、こんにちは。今回でシリーズの最終回となりました。これまでの講義はいかがでしたでしょうか。今回は、企業にとって重要な「カネ」についてお話しします。普段、仕事のスキルを指導している職業訓練指導員の皆さまにとって「カネ」という視点は、なかなか理解しにくいものだと思います。またこれまで学ぶ機会があまりなかった方も多と思います。しかし企業にとって「カネ」は、ビジネスを継続するための生命線です。「カネ」がうまく循環することで、「ヒト」を育てたり、「モノ」を購入したり、生み出したりすることができます。

今回は、職業訓練指導員の皆さまが企業の支援や訓練生の就職指導等をするために、最低限知っておきたい「損益計算書」、「貸借対照表」、「損益分岐点」の3つを取り上げ、その仕組みや意味を学びたいと思います。

これらの財務データは、企業の経営状況を把握するために必要不可欠なものです。しかし、初めて学ぶ方にとっては、難解な専門用語が多く、理解するのが難しいかもしれません。そこで、今回は、できるだけわかりやすく、簡潔に説明していきます。

2. 企業と「カネ」の関係

「カネ」は企業にとって重要な経営資源の一つであり、企業が経営目的を達成するために必要不可欠

なものです。経営資源としての「カネ」は、企業の資本としての観点からアプローチされます。企業が利益を上げるためには、資本を投入する必要があります。このために、企業は「カネ」を調達し、経営活動を行っています。また、企業が持続的な成長を遂げるためには、資金計画を立て、資金を効率的に活用することが必要です。したがって職業訓練指導員の皆さまにとって、企業の財務状況の見方を理解することは、事業主支援や就職支援などにおいて、有益な情報を得ることができるものと言えます。

3. 損益計算書とは

はじめに「損益計算書」について簡単に説明します。「損益計算書」とは、企業が一定期間内に得た収益と支出を比較した財務諸表の一つで、企業がどれだけもうけたか、あるいは損失を出したかを示すものです。損益計算書を見ることで、企業の収益性や経営状況を把握することができます。損益計算書を模式的に示したものが、図1です。

図1に示すように、損益計算書は、以下の6つの利益で成り立っています。

- ① 売上総利益：売上高から原価を引いた利益です。
- ② 営業利益：営業活動で得た利益であり、企業本来の事業活動で得た利益です。
- ③ 経常利益：本来の事業活動以外でかかった費用を含めた利益です。
- ④ 税引前利益：臨時的に発生した費用を含めた利益です。

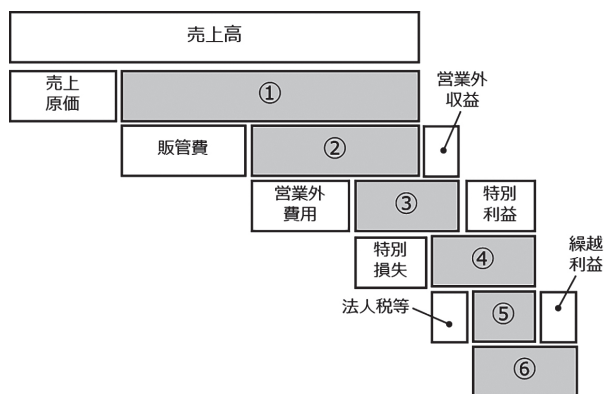


図1 損益計算書の仕組み

- ⑤ 当期利益：法人税等を引いて計算された利益です。
- ⑥ 当期末処分利益：最終的に残った利益です。

4. 貸借対照表とは

次に「貸借対照表」とは、企業の一定時点における財政状態を示す決算書であり、資産、負債、純資産の3つの要素から成り立っています。図2に示すように、貸借対照表は左側に資産の部、右側に負債と純資産の部があります。資産の部は「流動資産」と「固定資産」に、負債の部は「流動負債」と「固定負債」に分かれています。

貸借対照表の見方については、以下ようになります（図3参照）。

(1) 資産の部

企業が所有する資産を示します。資産の部は、流動資産と固定資産に分かれます。流動資産は、1年以内に現金化できる資産であり、固定資産は、1年以上の期間を経て現金化される資産です。

(2) 負債の部

企業が抱える負債を示します。負債の部は、流動

負債と固定負債に分かれます。流動負債は、1年以内に返済しなければならない負債であり、固定負債は、1年以上の期間を経て返済される負債です。

(3) 純資産の部

企業の純資産を示します。純資産は、資産の部から負債の部を引いた残りの部分です。

貸借対照表の分析には、以下のようなポイントがあります。

- ・流動比率：流動資産を流動負債で割った値で、企業の短期的な支払い能力を示します。
- ・当座比率：当座資産を流動負債で割った値で、企業の即座に支払える能力を示します。
- ・固定比率：固定資産を純資産で割った値で、企業の安全性を示します。

貸借対照表は、企業の財政状態を示す重要な決算書です。また上記の比率は企業の健全性を判断する指標として活用されます。

この貸借対照表で、特に職業訓練指導員の皆さまが見るべきポイントは、図3で示している、左右に示す点線の上下関係です。ザックリとした感覚ですが、資産の部（左側）の点線が、負債の部（右側）の点線よりも下側にきていれば、「健全」な企業運営を、上側にきていれば「不健全」な企業運営をしている見ることができます。細かな点は、専門的な書籍で確認していただければと思います。

5. 損益分岐点とは

最後に「損益分岐点」についてご説明します。「損益分岐点」とは、図4に示すように企業が利益も損失も出さない売上高のことを指します。つまり、企業が費用を賄うために必要な最低限の売上高



図2 貸借対照表の構造

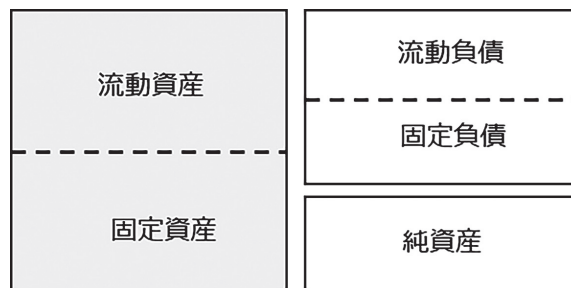


図3 資産と負債

を示す指標です。損益分岐点を超えると、企業は黒字（利益）となり、下回ると赤字（損失）となります。

損益分岐点は、企業の総費用に対して売上高がどの程度必要かを示す指標であり、総費用は変動費と固定費で構成されます。変動費は売上高に比例して増減する費用であり、固定費は売上高に関係なく一定の金額が必要な費用です。この関係を図5に示します。

企業が利益を上げるためには、以下の3つの視点が重要です。

- ① 変動費を下げる。
- ② 固定費を下げる。
- ③ 販売数（売上）を上げる。

これらの視点は、企業の人材や物品といった「ヒト」「モノ」にも連動していることを理解していただきたいと思います。事業主支援や企業への人材供給の役割を最前線で担っている職業訓練指導員の皆さまにとっても、重要な事項だと思えます。

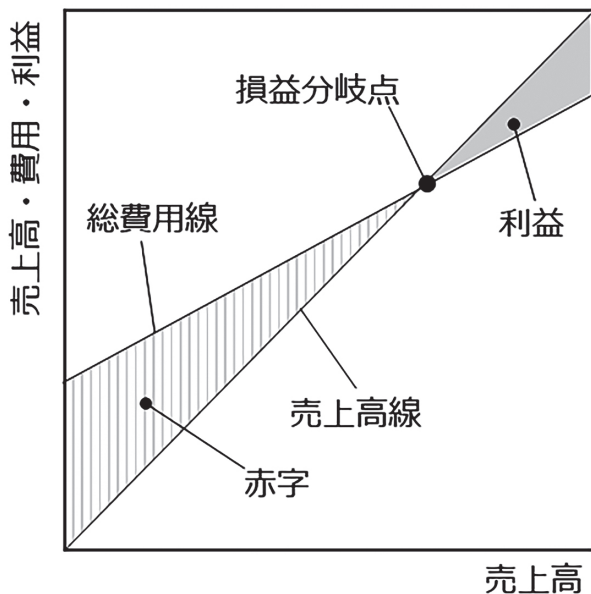


図4 損益分岐点

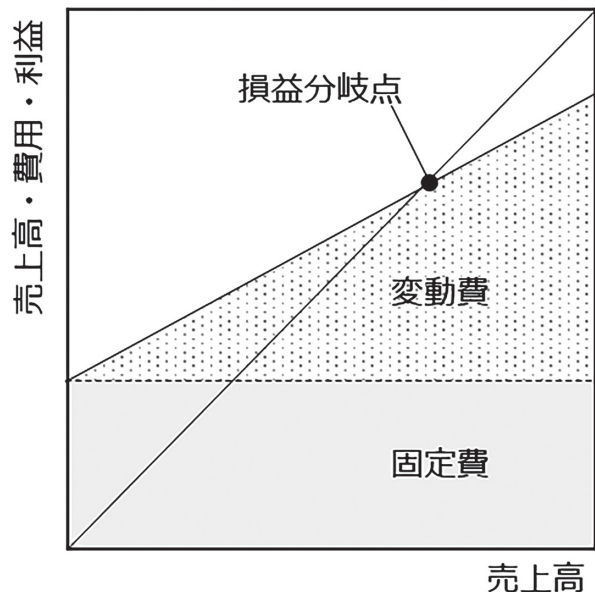


図5 変動費と固定費

6. 講義のまとめ

最終回の講義は、職業訓練指導員の皆さまが普段、あまり意識していない「カネ」の基礎を学んでいただきました。いかがでしたでしょうか。

これまでの3回の講義で、企業の経営資源について関心をもち、日頃の企業支援や就職支援などの場で、思い出していただければと思います。

7. 講義動画の公開

今回の内容をオンデマンド動画で公開しております。ご興味のある方は、下記のQRコードまたはURLからアクセスしてください。



<https://eqm.page.link/tQNS>